

紹興の階層に対する魯迅の見方（下）

丸尾 勝

（上）目 次 〈『中国言語文化研究』第17号掲載〉

一 はじめに

二 「人の思想」

三 魯迅の自伝等より

四 魯迅の作品の登場人物

（1）小説等における支配者と被支配者についての見方

（2）支配者の上層階層と被支配者の下層階層

（3）『故郷』（1921年）と「閨土」

（4）『阿Q正伝』（1921年・1922年）

（5）第四節のまとめ

五 周房族

（1）魯迅の出身階層

周房族は零落するが、元来大地主で、支配階層に当たる。支配階層である周房族の一員であったことについて魯迅はどのように思っていたのだろうか。

第一節と第三節で取り上げた『英訳本《短編小説選集》自序』（1933年）で、都市の大家族の中で生長し、古書と師匠の訓育を受ける存在であり、また、生涯圧迫と多くの苦痛を受ける農民の階層の存在を知ったと述べる⁽³⁸⁾。同じく第三節で取り上げた『致蕭軍』（1935年）の手紙で、自分は「封建社会におけるおぼっちゃん（原文は「我正在封建社会里做少爷」）」、「読書人家庭の子供」、「没落した名家の子弟」であったと述

べている⁽³⁹⁾。また、既に触れたことであるが、第四節の（3）『故郷』（1921年）で、小説ではあるが、「私」のことを「坊ちゃん」と述べている。これらの叙述から、魯迅は自分は支配階層に属していたことを認め、その支配を受ける階層の存在を知っていたことがわかる。

（2）大地主の周房族

（ア）周房族

十四世の魯迅より6歳若い叔父に当たる周冠五は十三世、致房の仁房の義房所属で、魯迅と同じ新台門に住む。その著『回憶魯迅房族和社会環境35年間（1902－1936）的演變』（1959年）の『周氏家族的經濟情況』で周房族の由来を説明している。始祖逸齋公は竹園橋辺りに住み、一世、二世は貧農で無産階層に属する。三世、四世で生活が安定し、富農になる。五世、六世でますます豊かになり、地主になり、転居を重ねた。七世から十世まで福彭橋辺りに居を移し最盛期であった。家屋は老台門、新台門、過橋台門の他、福彭橋から都昌坊口までの南北の家屋の多数や小過橋台門なども所有した。田地は南門と偏門の外はほとんど周氏の所有であったと言う。八世熊占公は致・中・和の三房に分け、九世佩蘭公は致房をさらに智・仁・勇の三房に分けた。その一つである勇房の文書によると、田地の所有は226.6455畝とあり、財産を均一に分けるはずなので、その3倍に祭田160畝を加えると839.9365畝になり、その3倍、2519.7畝に祭田240畝を加えると総計2759畝と推定できる。これに読書田や私有田地が加わると3000畝程になる⁽⁴⁰⁾。3000畝は184ヘクタール（清朝の1畝は6.144アール）に当たり、東京ドームグラウンド（1.3ヘクタール）の約141倍になる。さらに、家屋、質店、元手の資本金等がある。周家は紹興の大地主で、大家である。収租について次のような事件が伝わる。ある年、今年は収穫が良

く相談もせず一律に徴収すると言う噂が立ち、農民は「鶏血酒」を飲んで同盟を結び抗租運動を起こした。通報を受けた山陰、会稽両県の役人が駆けつけ片っ端から逮捕した。地主と役所が結託をして農民の抗議暴動を收拾したと言う⁽⁴¹⁾。

その後、魯迅の祖父周介孚の代である十二世の頃から衰退が始まった。中房は和房より人が多く、享樂にふけり、氣儘に金を使い、仕事に就かず、田地・家屋を売り、住むにも食べるにも困ったことになった。致房は中房よりさらに人が多く、努力したが支出が収入より多く、立ち行かなくなった。両房とも膨大な赤字になり、軍事的な影響（太平天国の軍隊の侵入による被害）もあり、十二世の代には破産の憂き目に遭った。和房は一子相伝で資金を蓄えることができ、致房、中房などの田地を購入し順調に資産を増やしていった。が、十一世の頃突如致房や中房の悪い風習が起こり、家計を顧みず、節度なく酒色に溺れ、享樂にふけり、生産に励まず、遂に没落に至った⁽⁴²⁾。

（イ）周房族の人々——周冠五の見方

周冠五は上記第五節（2）（ア）のように、周房族の興亡とその衰退の原因について述べた。そして、その同著の『周氏の崛起与衰落』で、周房族の人々について、「これらの多くの人たちはその考えは異常で、楽しむことだけは知り、一代一代ごとに従来どおりで改めず、幾代かを経てついに蓄えを使いつくし、子孫に傲慢で快樂にふける悪習を覚えさせてしまった。金を思うがままに使う特技の他に何の能力もなく、落ちぶれて貧相な身なりになった。」⁽⁴³⁾、「三台門の人物はその性質は特殊で、その行為はひねくれて偏屈で尋常ではない道楽者である。」⁽⁴⁴⁾と述べる。そして、彼は『三台門的遺聞佚事』で、周房族のそれぞれの個人の特徴を指摘しているが、それらを次の段に整理する。それらは周冠五の見方であるが、周作人の『魯迅的故家』

にて補充し、補充した箇所には〈＊〉を付ける。周冠五と言えども房が違えば交際も疎くなるはずで、また、その著は伝聞を含むので、念のため周房族全員について、ただし、魯迅の見聞の及ぶ十二世、十三世を主にして整理する。

まず、個人の性癖が過度である。阿片・水煙吸引の常習。酒への溺れ。賭博狂い。骨牌狂い。神経が異常になり自殺。茶館への入り浸り。生阿片を吸っての死亡。ラン・虫育成。楽器演奏に執着。頑固で迷信深く潔癖症。道学者風から荒唐無稽への変転。乱暴で知識は浅薄で頻繁に怒り妬みが強い。宝探しに没頭〈＊〉。院試で弟は合格したのに不合格になり腹いせに桂花を引き抜く〈＊〉など。次に、人への損害や迫害も過度である。親の子への暴力、それによる子の行方不明。養母が子の財産を横取りし、迫害し追放する。金持ちには諂い貧乏人にはいばる。一日中人の欠点を挙げたて責めバカ呼ばわりをする。義母が子の世話を放棄し子にひどい生活を強いる。他人所有の部屋の占拠。教師の生徒への虐待。油・醤油等は買わず借りても返さずのように常に損得を考える。金を借りまくり決して返さない錢穀師爺。凶悪で悪辣で、意に沿わない人には決して容赦しない。子が父に体中傷だらけになるまで折檻され逃亡するなど。そして、異常な男女関係もある。親戚である男女の密通、不倫、凌辱、それによる自殺未遂。妻死亡後寡婦とよい仲になる。妾にしたとたん逃げられて大損するなど。さらに、仕事や生き方において尋常ではない。教師に反抗し退学する。科举賄賂事件。よたもの。仕事が続けられず乞食になり凍死する。なんの仕事もせず、魚虫花鳥音楽や色事に終日執着する。女中に手を出し、支出が超過し、娘三人の嫁入りや里帰りで費用が嵩み和房は没落する。親が朝茶用の水を汲みに行かせた使用人の監視を子にさせ、茶店の捨てた茶葉を拾いに行かせ、真夜中まで休ませず、ついに体の弱い子を死なせる。夫に死なれた寡婦は親戚の男と

よい仲になり、祖父にすぐ離縁されるが、寡婦の実家は離縁を認めず、仕方なく尼になり、祖父の死後祖父の妾がその尼を還俗させ、還俗した寡婦は男の子供にも阿片を吸わせ、男女のことを教え、15歳で結婚させ、切り傷を絶えず負わせ殺してしまう。さらにその寡婦は黒い痣がある娘と、自分の交際した中房の慎房の独身男性と結婚させる。——周冠五はこの寡婦の一連のことはでたらめである（原文は「荒謬绝伦」）と言う。過橋台門の人は最も早く屋敷を売却し其の後は行方不明となる。ごろつき〈*〉。片手に阿片用の煙管、片手に酒の茶碗、これが落魄した大家の出身である長衫族の「破脚骨」（ごろつきの低級な組織）の姿である〈*〉。生活をする術を知らない〈*〉

（魯迅は1935年8月24日付けの『致蕭軍』で父伯宜は「金を稼ぐことができない」と述べる⁽⁴⁵⁾）。他に、太平軍関係の事件がある。太平軍に反抗して殉難死し、それにより褒章をもらう。太平軍に従軍した罪で拷問され重傷を負い死ぬ。太平軍に従軍し拳が失敗すると意気消沈し神経が異常になり自殺する。太平軍に従軍し、その後行方不明となる。好ましい、優れた人物もいる。進士や挙人になった人もいる。広く深く学問をし、種々の作品を善くし、魯迅もその啓蒙に好感を持った人もいる。清廉潔白、公平無私、誰からも好かれる人もいる。14歳から徒弟になりずっと勤儉刻苦し、魯迅との手紙の往来が多い人もいる⁽⁴⁶⁾。

なお、以上は逸話でいささか大袈裟な言い方が多いと思われるが、周冠五は、「十二世以下について自分の見聞したことを述べる。伝わる話は重ねて選択し、真実性があるものを述べ、真実性が低いものや人により言うことが違うものは棄却し、なるべく正確なものを採用する。」⁽⁴⁷⁾と言う。

（ウ）魯迅の周房族についての見方

本論の冒頭で、『英訳本《短篇小説選集》自序』の中の「上

流社会の虚偽と腐敗」、「上流社会の墮落」と言う箇所を取り上げたが、この故郷紹興の「上流社会」は周房族を含むと思う。その理由を次に述べる。

まず、前段で述べた『英訳本《短篇小説選集》自序』の中で、「上流社会の虚偽と腐敗を感じた」とあり、その「虚偽と腐敗を感じた」という「上流社会」とは紹興の上流社会であり、紹興の上流社会の中で魯迅に最も身近なのは周家であり、その、周家は紹興の代表的な上流階層であり、典型的な地主階層である。第五節の「（１）魯迅の出身階層」で述べたように、魯迅は周房族という支配階層に属していたと認めていて、周家を外すことは不自然であり、また、外す理由も見当たらない。なお、「虚偽と腐敗を感じた」という「上流社会」は周家だけではないことは、第六節「他の上層階層」で述べる。

次に、前段等で触れた『英訳本《短篇小説選集》自序』の中で、「私はいわゆる上流社会の墮落と下層社会の不幸を、次々と短編小説の形式で発表した。」とある。逆に言うと、その短編小説、『呐喊』と『彷徨』の小説は「上流社会の墮落」という一面を表し、紹興の人物をモデルにした登場人物は紹興の「上流社会の墮落」という一面を表すことになる。モデルとなった紹興の人物の中には、第四節（２）（３）で指摘したように、周房族の人もあるし、他家の人もある。その他に、登場人物とモデルの関係について魯迅のみが知ることがあるかもしれない。よって、この「墮落」した「上流社会」は周房族や紹興の上層階層の他家を指すことになる。魯迅は周冠五や周作人のように周房族の人々について日記や書信以外で直接言及することは少ないが、小説の中でかれらの悲惨さやどうしようもなさなどについて語っているのである。なお、前段で述べたことと同じであるが、「墮落」した他家については第六節「他の上層階層」で述べる。

第三に、上記（ア）、（イ）で周冠五の周房族の見方を紹介した。「享樂にふけり、氣儘に金を使い、仕事に就かず、田地・家屋を売り」、「突如悪い風習が起こり、節度なく酒色に溺れ、享樂にふけり生産に励まず家計を顧みず、遂に没落に至った。」、「周房族の多くの人たちはその考えは異常で、楽しむことだけは知り、一代一代ごとに従来どおりで改めず、幾代かを経てついに蓄えを使いつくし、子孫に傲慢で快樂にふける悪習を覚えさせてしまった。金を思うがままに使う特技の他に何の能力もなく、落ちぶれて貧相な身なりになった。」と見る。そして、同じく（イ）で、それぞれの個人の思うがままに生きる様子を述べた。これらを次に整理する。快樂や趣味にふけり浪費し、多くの族人は阿片や水たばこを吸い多額の金を無駄使いし、欲望のままに節度なく動き回り、無為徒食が忘れられず生計を立てることもせず、働く方法を知らず、知っていても氣位を貶めない質屋・両替屋の経営などは多額の資本金を必要としまなならず、田畑を売却したり担保に入れ借金をし、こうして浪費するのみで稼ぐことをせず生計を顧みないことが代々続き、来る没落の危機を前にしてどうすることもできない。

魯迅は幼少期より周房族や農民などいろいろな人と交際し、祖父の入獄、父の病死、田舎への避難などと様々な体験をしてきた。そして、「世間の人々のいつわらぬ姿を見る」（『《呐喊》自序』1922年）⁽⁴⁸⁾、「腹の底まで大体わかるような気がする」（『瑣事』1926年）⁽⁴⁹⁾といったように人を見る眼を成長させてきた。『英訳本《短編小説選集》自序』（1933年）で既に引用した箇所であるが、「私は都市の大家族の中で生長し、～時には所謂上流社会の虚偽と腐敗を感じる時があった」⁽⁵⁰⁾と述べている。魯迅と周冠五は同じ新台門に住み、年齢もそれほど離れていない。没落に向かう家の子は、早くに近くにいる、没落に至る周房族の人々の姿に、周冠五が第五節（2）（ア）で

指摘したような周房族の性質、行為、好みの尋常ならざるものを感じ取り、やがて、それが腐敗、墮落という認識になっていったのであろう。ただ、少年の時に「腐敗、墮落、虚偽」と認識したのではなく、周房族の尋常ならざるものについて下記の没落、離散の経過のなかで徐々に「腐敗、墮落、虚偽」と認識していったと解釈すべきであろう。

魯迅は没落の様子を見聞し、没落を体験し、離散を経験した。興房の周家は、十二世の進士周介孚は科挙賄賂事件を起こし、入獄し、出費が多くなる。父の周伯宜はその事件のため秀才の資格を剥奪され、病気で医療費が嵩み、借金をして、やがて病死する。魯迅は、1898年に授業料のいらない南京の学校へ行き、公費で1902年留学する。その間、何度か紹興に帰郷している。1909年帰国し杭州の学堂で勤務し、翌年紹興に帰り学校の勤務に就く。1911年3月7日付け許壽裳宛ての手紙に「享有田の分割」とある。これは「公同議單」での「祖智公祭田」の分割を指す。遂に祭田をも分割し、各自で売却できるようになった。この約定書は周作人が保存し紹興魯迅紀念館に寄贈したものである。約定書の日付「宣統三年」（1911年）当時、魯迅は紹興に居り、会議に出席し、「執行人」となり、約定書に押印する。周作人はまだ帰国していないので押印はないが名前は書かれ、「執行補助人」になっている。分割の理由は「近年家計が傾き、子孫は仕事がなく、人数が多く、衰微の様子は各所で見られる。しかし、富を得て貧困を救う方策もなく、やむを得ず祖智公祭田に手を付けることとなった。」⁽⁵¹⁾である。「執筆人」は字のうまい周仲翔である。文案作成者は不明であるが、この売却に至った理由に、「執行人」として中心的役割を果たした魯迅は同意したはずで、その理由は大まかであるが、周冠五の周房族の見方とほぼ同じである。そして、「執行人」として中心になって祭田を分割し、つまり、周房族の没落を目の当たりに見た

ことになる。

なお、分配は房分配を基本としながら人数分配を考慮している。であるから、この約定に参加することが分配を得ることになる。致房については智房の興房は魯迅を含めて14世3人、立房は13世1人、誠房は13世2人、仁房の礼房は13世1人・14世1人、義房は12世2人・13世5人、信房は13世1人、勇房の笠房13世1人、笙房は14世1人、笛房は12世1人・13世3人、計22人である。中房については裕房は13世1人・14世2人、慎房は12世1人・13世2人、恕房は14世1人、計7人である。和房については13世妻憑夫人1人である。ここに名前のない人々はどうなったのかが問題である。

そして、魯迅は1912年以降南京、北京へと転居するが、翌年帰省している。そして、新台門の家屋売却に至る。この売却の文書が「絶売屋契」（1918年）である。『魯迅日記』には、1916年12月母親魯瑞の還暦祝いのため紹興に一月ほど帰郷すると書かれていて、屋敷の売却や引っ越しなどを相談したのであろう。そして、1918年10月付けの売却約定書が作成される。1919年8月19日八道湾の家の購入契約をする。1919年11月21日二弟の家族と共に八道湾の家に転居する。1919年12月1日離京、4日紹興着、19日送別会出席、22日消搖瀟へ墓参り、23日家屋売却に署名、24日母と三弟及び家族の者と紹興を発つ、29日八道湾の家に着くと書かれている。この家屋売却の証文には、致房の智房と仁房の所有者12人が署名押印している⁽⁵²⁾。遂に屋敷の売却となり、離郷に至り、房族の没落、離散そのものを体験する。

このように、魯迅は年少の頃から没落と向き合い、没落していく周房族の、周冠五の言うような尋常ならざるものを感じ取り、没落に至る周房族の人々の姿を周冠五と同じように見聞し、そして、自分の家の分割、売却という没落を体験し、周冠五と同じように周房族の人々の姿を腐敗、墮落と認識していったの

ではないか。ただし、第五節（２）（イ）で述べたように周房族のすべての人々がこのようではない。

第四に、魯迅の弟の周作人や祖父の周介孚の周房族の見方は周冠五の見方とほぼ同じである。周作人は『魯迅的故家 台門的敗落』で周房族について次のように述べている。「家運隆盛の時は無為徒食ができたが、家運が傾くと生計を立てる術がなく没落の一路を辿るばかりであった。『台門貨』（お屋敷の人）の伝統に拠れば行く手は三つの道しかなかった。はじめから地主である、もしくは質屋か両替屋を始められる場合は例外である。その一は科挙に応じ举人、進士になる。その二は幕友となることで、科挙は不合格か、あるいは秀才以上に進級できない場合は師爺に転向して補佐役として称せられる道である。その三は商売を習うことであるが、質屋か両替屋に限られ、呉服店以下の商売は潔しとしない。第一、第二はどちらも多少なりとも自己の才学力量によるもので、書物がろくに読めないとか、あるいは、知識が不足していると、成功はなかなかむずかしい。第三も有力な後援のあることが不可欠で、しかも、失業後の再起は容易ではない。特に質屋の手代は、俗に『朝奉』という尊称があるが、渾名で『夜壺鑑』（尿瓶のハンダ）と言われ、それは他の食器には改造できないからである。こういう有様で、低すぎてはダメで、高すぎては力及ばずで、結局坐して食らえば山をも空しで、不可思議極まる生活を現出し、果ては台門は分散し人込みの中に紛れて行方知れずとなる。かれらの素地から言えば、帰農することは無理でも、腕のよい職人か普通の手代にはなれるだろうが、だが、怠惰なのか気位が高すぎるのかでどうにもものにならない。台門の積習が彼らを歪めてしまったのである。」⁽⁵³⁾。大体周冠五と同じ見方をしている。周作人の言う没落読書人の子弟の行き先は、举人か進士合格か、幕友か、質屋・両替屋かである。科挙は1904年に廃止されている。

没落読書人の子弟の魯迅も周作人も周冠五もどう選択するかである。魯迅は、「私の母は～どこか授業料のいらぬ学校を探して入るように言った。私が幕友にも商人にも――それが私の郷里の没落した読書人の家庭の子息が常にたどる二つの道であったが――なることをどうしても嫌がったからである。」⁽⁵⁴⁾と述べる。魯迅は没落読書人の子弟の行き先について周作人と同じ見方をしているが、没落の原因理由についても同じような見方をしていたのではないか。結局魯迅は三つの道が嫌で別の道を選び、周作人も同様で、周冠五は幕友を選んだ。

周介孚は『恒訓』の『家誠』で、「嘉慶、道光年間（1796年～1850年）に、族中の多くが贅沢を真似しあい、それにつれて財産を失った。加えて十七爺房の後継争いに遭遇し、京師に訴え出たため、各房で没落する者が続出した。だが分家である予の、高祖の房は昔ながらの小康状態を保っていた。しかし、予の同輩の代から生計に携わらなくなり、甥たちの世代は先代の真似をして田産を売り家屋を抵当に入れて借金したため資産が尽きてしまった。予は自ら栄枯盛衰を経験してきたし、この眼で没落を招いた原因も見てきた。」⁽⁵⁵⁾と述べる。「高祖の房」とは和房のことである。魯迅、周作人、周冠五は同世代であるが、周介孚は魯迅の祖父で世代が離れている。が、見方がほぼ同じであることは、世代を離れても同様のことが繰り返し行われていることを示す。その没落の見方は、後継争いや訴訟による争い以外は周冠五とほぼ同じである。その『目録』に、「努めて愚昧怠惰に陥らないようにせよ、努めて阿片、煙草と酒を慎め、努めて悪友を避けよ。」とあり、『家鑑』では、「ひたすら子供を我儘にさせる、ひたすら女の言葉を信ずる、ひたすら世間体を気にする、以上は没落の元で、良心を持つ、定職を持つ、蓄えを持つ、以上は家を興す鑑。」⁽⁵⁶⁾とある。これらの『目録』の題目は没落しないための心構えであり、つまり、周

房族の没落した原因でもある。周介孚の見方も周冠五や周作人と、後継争いや訴訟による争い以外はほぼ同じである。魯迅も同様ではないだろうか。

最後に、上記の第一と第二の理由の所で述べ、また、詳しくは次節で述べるが、墮落といった内部事情で没落していったのは、周房族だけではなく、魯迅の母方の魯家や魯迅の母の嫁ぎ先の酈家なども同様であった。魯家や酈家などの没落の原因は周家の場合と同じく、働かず阿片を吸飲し浪費するだけという内部事情にあった。そして、内部事情によることがわかっていてもその内部事情をどうすることもできず没落に向かっていくのである。つまり、墮落といった内部事情で没落するのは特殊なことではなく、地主階層などの大家が没落の内部事情を抱えているのであり、周房族でも起こりうることであった。魯迅も周房族の一員であるが、内部事情をどうすることもできずただ没落を見守るしかなかった。

六 他の上層階層

第五節（２）の（ウ）「魯迅の周房族についての見方」の第一の理由の所で、魯迅が「虚偽と腐敗を感じた」という紹興の「上流社会」は周家だけではなく、他家でもあると述べた。また、第二の理由の所で、「私はいわゆる上流社会の墮落と下層社会の不幸を、次々と短編小説の形式で発表した。」と言うように、魯迅の短編小説は「上流社会の墮落」という一面を表し、紹興の人物をモデルにした小説は紹興の「上流社会の墮落」という一面を表し、その「上流社会」は周家でもあるが、他家でもあると述べた。ここではその上層階層の他家について述べる。

（１）魯家、酈家

魯迅の母魯瑞の生家が魯家である。張能耿・張款に拠れば、

三世魯世卿（魯迅の外曾祖父）は貧しさに発奮して科挙試験を受け合格して役人になり、後700畝の田を得た地主になり、その三男魯希曾（妻は何氏）は挙人になり二男三女をもうけたが、病のため皇甫莊に帰郷したと言う⁽⁵⁷⁾。そして、魯迅の外祖父にあたる魯希曾が挙人として役人であった頃は長男の魯怡堂と次男の魯寄湘も裕福でいられたが、魯希曾が病で辞職して帰郷し死ぬと、その子二人は求職もせず阿片を吸飲し、「坐吃山空」（働かずにいればどんなに財産があっても食いつぶしてしまう）で、支出が多く、雇人も多く、魯迅が訪問し寄留した頃は、魯家は急激に没落に向かっていき、魯怡堂の息子は早世し家は断絶し、その弟の魯寄湘は没落の一代であり、薬屋を開き騙された事件を帰国していた魯迅に解決してもらい、没落読書人の子弟の末路である師爺として二度上京し魯迅とも往来し職を探したがうまくいかなかったと言う⁽⁵⁸⁾。このような魯家の没落の事情は、挙人が出て生活が一変したが、百年も経たぬうちに没落したという周作人の記述を根拠にしている⁽⁵⁹⁾。地主階層の魯家は、阿片を吸い無為徒食を続け墮落した生活を送るという自らの内部事情で没落の憂き目に遭った。魯迅は母とともに皇甫莊の祖母何氏の所へ度々訪れ、そして、皇甫莊より魯怡堂が移り住んだ小皋阜の当台門には、祖父の賄賂事件で避難のため魯迅と周作人も一時同居し、魯家の人々、その同居人や土地の農民たちとつきあいがあった。魯迅はそれらの人たちから文化的な刺激を受け、それらの人たちの姿を見、農民たちの生活を知った。

（2）酈家等

魯迅の母の下の子、魯蓮の嫁ぎ先が酈家であり、魯蓮の夫は酈拝卿である。酈家は紹興の上層階層であり、酈家とは魯迅は行き来があった。酈拝卿は挙人に合格せず、骨董品の収集に没頭し、各地を回遊し碑文を収集し、家計を顧みず散財し、つい

には教師を稼業として生活をしのぐ事態になり、中風で50歳で急死した⁽⁶⁰⁾。酈家は1915年屋敷を売りに出し、息子たちは母魯蓮とともに転居した⁽⁶¹⁾。やたらと散財し大家の没落の原因をつくったことは上層階層の墮落と言える。そして、その息子酈永嘉は北京で師爺になり、流行病で30歳で死に、辛亥革命前後紹興で教員をしていた魯迅と往来があった酈永康は教員の後有名な画家となり、日本に留学中の魯迅は没落に向かう酈家の酈永庚が養蜂を始めたと聞き、実用的な住宅の模型を作り送ってやった⁽⁶²⁾。

魯迅の母の上の姉の嫁ぎ先は紹興の大家の阮家で、夫、阮有俊は杭州での挙人の試験の時答案が突風のため行方不明になり、茫然自失の状態が続きその年に46歳で急死した⁽⁶³⁾。父親が急死した後、魯迅とほぼ同世代である四人息子、阮羅孫、阮康孫、阮和孫、阮久孫はみな師爺になる。阮和孫は北京の魯迅を訪問したことがあり、また、魯迅との手紙のやり取りがとても多い。阮久孫が家の没落で学費に困っていた時魯迅は学費を出してやったことがあり、また、阮久孫が精神の病状が悪化し魯迅を訪ねてきたので医者に診させ、帰郷させたことがあり、『狂人日記』のモデルになった⁽⁶⁴⁾。ただ、阮家は没落に向かっていったが、その原因はよくわからない。

魯希曾の三女、魯迅の母の夫の周伯宜も祖父の収賄事件で科挙の資格並びに受験の機会を失い、挙人にはなれず、37歳で病死した。魯希曾の三人の娘の三人の夫たちの、阮家、酈家、周家は紹興でも有名な大家で、広大な屋敷を構え、地方の支配層に当たる。しかし、三人ともに挙人になれず、長生きせず病気で死に、家は没落に向かっていった。阮家の没落の原因はよくわからないが、酈家、周家の没落は前述したように腐敗、墮落による。そして、彼らの息子のほとんどは師爺や教員で暮らしを立てることになる。既述したように、没落読書人の子弟の末

路は師爺か教員、あるいは人込みの中に紛れて行方不明になることである。

そして、周介孚の科挙（郷試）賄賂事件（1893年）の際、周介孚へ不正を依頼した五家、顧家・馬家・陳家・孫家・章家は、合格できない子のため相当な額の賄賂を贈り、不正に合格を画策した上層階層である。無論周介孚は自分の子の周伯宜を不正合格させようとした。その他の五人の受験生について、馬蹄疾は、錢碧湘が章家は道墟の土豪の章介千の子で、馬家は介孚の翰林院の同僚の子馬家壇（紹興会稽）で、他の三家は親戚関係だろうと言うがその説に同意し、陳家は紹興山陰鑑湖清水閘大族陳氏第十七世孫陳坤生であると言う⁽⁶⁵⁾。ただ、入獄したのは周介孚だけで、周伯宜は科挙の資格並びに科挙の受験の機会を失ったが、結局他の人は罪を問われることはなかった。これにより魯迅の家は没落を速めていき、魯迅は苦しい生活を味わうことになる。こうした事態を鑑みれば、魯迅が章家等の五家について腐敗墮落した醜悪な上層階層であると思っても不自然ではないだろう。

（3）章介眉、王金發、並びに新地方政府に群がる有力者たち
魯迅の『論《費厄撥賴》應該緩行』（1925年）では、辛亥革命後の紹興の都督王金發は秋瑾を密告した首謀者を逮捕したが、結局釈放してしまい、第二革命が失敗すると、袁世凱の手下が王金發を銃殺し、秋瑾殺害の首謀者がこれに深く関わっていたと言う⁽⁶⁶⁾。その首謀者は章介眉であると言う⁽⁶⁷⁾。

章介眉は武昌起義後、杭州光復の日知府と図り紹興光復をいち早く宣言したが、数日後軍政府分府を設けた王金發によって秋瑾の件等で逮捕された。章介眉は秋瑾の墓をあばいたことはないとし立て、全財産を寄付すると言って、結局釈放された。後に袁世凱に仕えた章介眉はその財産を袁世凱の手を経て取り戻

し、王金發の殺害に関わったと言う⁽⁶⁸⁾。魯迅はこの裏切りを、打倒された地主が奪い返した典型的な例として『論《費厄撥賴》 應該緩行』で取り上げてフェアプレーは急ぐべきではないと主張した。この人物は腐敗堕落し虚偽を働く上層階層であることは明白である。

魯迅は紹興府中学堂に勤務していた1912年に紹興光復を迎えた。『自伝』（1934年）で、「1912年、革命後紹興師範学校の校長に任命される。しかし、紹興革命軍の首領が強盗出身で、そのやり方を批判する私を殺すと言ったので、私は南京に行って教育部で仕事をした。」と述べている⁽⁶⁹⁾。首領とは王金發である。回想文『范愛農』（1925年）では、「どこを見ても白旗だった。だがそれは表面だけのことで、内実は旧態依然たるものであった。軍政府とはいえ、以前からの土地有力者たちがでっちあげたものであり、鉄道会社の大株主とかが行政局長、両替屋の主人が兵器局長といった具合だったからである。この軍政府は結局長くは持ちこたえられず」とあり、そして、「越社」の若者が魯迅に新聞発行の発起人の依頼をし、魯迅がそれに応じて、そして、軍政府とその関係者を批判する新聞が発行されたと述べている⁽⁷⁰⁾。そして、『《越鐸》創刊辞』（1912年）で、「越人は三大自由を得て以って于越の国を甦らせ辮髪（へんぱつ）の虜は無量の罪惡を負うて滅亡の底に沈みぬ。」と讃えながら、長い専制により民衆は衰弱し、その声は寂寥で、その志は閉塞し、天下のことは与らないと思ひ込んでいるが、そうではなく、共和の治は人みな肩に担う主人であり、本紙を創刊して、自由に言論し、個人天賦の権を尽くし、共和の前進を促すと述べる⁽⁷¹⁾。また、これらの様子は、『阿Q正伝』（1921年）で、革命党が実権を握ったが、たいした変化はなく、知事は官名が変わっただけで、拳人旦那も役職に就き、結局上層部の顔ぶれは以前と変わらず、また、革命の内容は辮髪が禁止された以外は旧態依

然たる有様であると述べ⁽⁷²⁾、つまり、名だけの革命で、虚偽の革命であったということである。この四点は誇張もあるが、ほぼ共通する点がある。それは、排満はなったが、旧の支配者が依然として支配者になり、民衆もまた以前と同じように社会の主人である意思を示さず、旧態依然であることである。

魯迅は辛亥革命に期待していたが、失望に終わった。魯迅は王金発を歓迎し、また、山会師範学堂の監督に任命された。それらの事情は、『自伝』や『范愛農』に述べられている。当初は改革するが後に有力者に取り込まれていく王金発と、王金発に群がり、執念深く自己保身を図る醜悪な有力者たちのことは、魯迅に期待感があり高揚感があっただけに腐敗墮落とより強く心に刻まれたと思われる。王金発は地主ではないが、紹興における腐敗墮落した上層社会の一人と考えられる。

七 まとめ

魯迅は少年期に、「所謂上流社会の虚偽と腐敗を感じる」というように、後に「虚偽と腐敗」と認める尋常ならざるものを回りの上層階層者に感じ取っていた。また、少年魯迅は「母親の実家の農村で時には多くの農民たちと接触することができ」というように、農民等と接触し、農民等を知った。魯迅はこれらのことにより、下層階層の存在を知り、それと対置する上層階層の存在を知る契機を得て、「封建社会におけるおぼっちゃん」といった言い方で自分が上層階層に属していたと自己認識する。

日本に留学した魯迅は本格的に文学に取り組むとともに、『文化偏至論』等の論文で「人の思想」を形成する。「人の思想」とは、群れより個人として自立し、迷妄や悪習などに惑わされず、虚偽・欺瞞・腐敗・奴隸的精神がない確固とした人として覚醒し、本来の内面を発揮し、人らしい人として立ちあがり、それ

により人の国を築くというものである。そして、魯迅は帰国し辛亥革命を体験し深い挫折感を長く味わった後、この「人の思想」に基づき、啓蒙のため、苦しんでいる人の姿を描き、社会の病苦をあばきだすような作品を次々と発表していく。1918年著の『狂人日記』から1926年著の『范愛農』までの、支配や被支配が見られるどの作品にも「人の思想」に基づく啓蒙、覚醒の意図が見られ、「人の思想」と、作品作成の意図と、各作品内容とは深く関連している。

そして、それらの作品の中に見られる支配被支配とは、地方の上層階層者あるいは封建社会による下層階層の支配であり、支配被支配は作品の中にその仕組みと共に描かれている。また、支配者の腐敗、墮落、虚偽も多くの作品で描かれている。作品の中で筆者が言わんとする見方の骨子が多く箇所で繰り返述べられていれば、その骨子は筆者の見方とみなしてもよいと思う。つまり、上層階層による下層階層への支配があり、封建社会による下層階層への支配があり、並びに、腐敗、墮落、虚偽が上層階層に見られ、これらのことは、魯迅の階層観と見てよいと思う。支配者は、地主、郷紳や地位の高い役人等であり、支配は封建社会の制度、習俗、迷信、低い女性の地位等に拠る。被支配者は、農民、民衆、寡婦、遊民等である。魯迅は支配被支配の問題を提示し、「人の思想」の具体的展開活動には尽力したが、「人の思想」並びにそれに基づく活動があったためか、また、文化面での活動に限定したためか、支配被支配の問題を政治として具体的に打開する方向には赴かなかった。

「人の思想」の具体的展開としては、魯迅は文学作品の発表、外国文学の翻訳や外国作家の紹介により、啓蒙、覚醒に力を尽くしたが、一方ニーチェやバイロンのような「超人」などの出現による啓蒙、覚醒に期待していた。しかしながら、「超人」などはなかなか現れず、旧体制や旧文化に染まらないこどもへ

の期待は失望に変わり、変革の志はしばんで転向し自滅していく変革者「魏連殳」を描く（1925年）までに焦燥し、「破壊者」は中国ではなかなか出現せず、出現したとしても大衆の唾で溺死すると言い出す（1925年）。『野草』が示すように、傍観するのみの通行人に慨嘆したり、希望の虚妄は希望と思ったり、ともかく前へ行くしかないと悟ったり、自己分析をしたりと彷徨する（1924、1925年）。こうして「人の思想」も色あせていく。そうしている内に、若者たちなどが段祺瑞政府に殺されるような事件に当面する（1926年）。

そして、保守革新などの争いは啓蒙者、変革者魯迅を必然的に巻き込み、また、魯迅は積極的に応戦していく。まず北京女子師範大学を巡る争い（1925年）に関わる。そして、「3・18事件」（1926年）が起こり、そのため魯迅は1926年北京を追われ、厦門、広州と転居し、広州でも「反共クーデター」が起こり、1927年上海に落ち着く。また、魯迅は「創造社」や「新月社」などと論戦し、また、雑感文で応戦していく。

1930年代の半ばの自伝や書信では階級についての意識は明確で強くなっている。1933年の『英訳本《短編小説選集》自序』では、「上流社会の虚偽と腐敗」、「上流社会の墮落」、「農民たちの圧迫と苦痛」、「辛苦に喘いでいる大衆」などの文言が階級史観を示していて、魯迅はマルクス主義を受容していることがわかる。1934年の『自伝』では、紹興革命軍の首領を批判し、陳源が「魯迅」の正体を暴露したため役人を解雇され逮捕状が出され、1927年の清党に憤慨し、自由大同盟（1930年）、左翼作家連盟（1930年）、民権保障同盟（1933年）に参加し、辛亥革命の不徹底や反動文化人を批判し、反軍閥、反国民党右派の旗幟を鮮明にしたことが伺える。『致蕭軍』（1935年）では、自分を「封建社会のおぼっちゃん」、「読書人家庭の子弟」、「没落した名家の子弟」と自己規定するほどに階級意識が強い

ことを示している。このように、マルクス主義の受容もあって階級に対する意識は強くなっている。少年魯迅が早くから異なる階層があることに気づき、やがて、支配被支配の認識に至る階層に対する見方は、マルクス主義の受容の素地になった。

ところで、本論文「上」の冒頭で、1933年著の『英訳本《短編小説選集》自序』を取り上げ、「農民たちの圧迫と苦痛」と対置しているのに、階級史観に基づく上流社会の支配の行為の文言ではなく、「上流社会の虚偽と腐敗」や「上流社会の墮落」の文言の方が用いられているのはどうしてか、という疑問を提示した。小説の内容として述べておきたかったということであろう。が、前段で確認したように、魯迅は当時階級意識を強く保持し、マルクス主義を容認し、階級史観を採用していたにも関わらず、支配者の被支配者に対する能動性がないか、あるいは弱い「上流社会の虚偽と腐敗」や「上流社会の墮落」という文言にこだわったのはどういうことであろうか。ただし、この上流社会は魯迅のよく知る紹興の上流社会である。

魯迅のよく知る、墮落した紹興の上流社会の一つは、以下四点の理由で、魯迅が所属していた周家であろう。

まず、前々段で述べた『英訳本《短篇小説選集》自序』の中で「上流社会の虚偽と腐敗を感じた」とあり、その「虚偽と腐敗を感じた」という「上流社会」とは紹興の上流社会であり、上層階層の他家でもあるが、魯迅に最も身近な周家でもある。

次に、前段等で触れた『英訳本《短篇小説選集》自序』の中で、「私はいわゆる上流社会の墮落と下層社会の不幸を、次々と短編小説の形式で発表した。」とある。逆に言うと、その短編小説、『呐喊』と『彷徨』の小説は「上流社会の墮落」を表し、紹興の周房族や他家の人物をモデルした登場人物は周家や他家の「上流社会の墮落」を表すことになる。

第三に、周房族をよく知る周冠五は周房族について、無為徒

食が忘れられず、快樂を貪り、贅沢を追い求め、高い気位から仕事に就かず、就いても気位を貶める仕事はせず、やがて没落したと見る。つまり、没落の原因は房族の人々の腐敗墮落という内部事情にあったと見る。ただし、中には好ましい人物もいる。周作人は、家運隆盛の時は無為徒食ができたが、家運が傾くと生計を立てる術を知らず、没落の一路を辿るばかりであったと見る。周介孚は、族中の多くが贅沢を真似しあい、それにつれて財産を失い、加えて後継争いで訴訟合戦になり、各房で没落する者が続出したと見る。周介孚の見方に後継争いによる訴訟合戦があるが、これ以外は周冠五や周作人とほぼ同じである。魯迅は、没落読書人の子弟の末路の自覚、公祭田の分割・売却、屋敷の売却契約、引っ越し、離散の一連の体験を、周冠五や周作人とほぼ共にしてきた。魯迅と彼らとほぼ同じ体験や認識であることから、魯迅の周房族の没落についての見方も彼らとほぼ同じ腐敗、墮落になるのではないか。ただ周房族のすべての人々をこのように見ているのではない。また、魯迅は早くから大人の墮落、腐敗に気付き、また、人を見る眼を育て、やがて、「人の思想」を形成しているので、その魯迅の方がより厳しい見方をしていたのではないか。そして、魯迅の見方は、その腐敗、墮落、虚偽を忌み嫌い、確固とした人を目指し、啓蒙を推進する「人の思想」を育み、また、上流階層の支配を否定する根拠となっていたのではないか。

第四に、周房族だけでなく、魯迅の母方の魯家等も没落の途上にあった。その没落の原因は周家の場合と同じで、働かず阿片を吸飲し浪費するだけという内部事情にあった。没落の原因は自らの墮落などの内部事情であるところから、没落していくのは特殊なことではなく、大家であれば起こりうることで、實際上、魯家を始めとして他にもあり、周家についても墮落による没落は充分ありうることであった。

以上の理由で、魯迅としては複雑な思いがあろうが、周家は腐敗墮落した紹興の上流社会の一つと考えられる。

上記の周家の没落の第一、第二の理由で述べたことであるが、魯迅が「虚偽と腐敗を感じた」という紹興の「上流社会」は周家だけではなく、他家でもあり、また、魯迅の短編小説は「上流社会の墮落」を表すというその「上流社会」は周家でもあるが、他家でもある。その上層階層の他家とは魯家であり酈家である。

上記の第四の理由で述べたように、魯家も、規模こそ違いがあるが、周家と同じような内部事情で没落の途上にあった。魯家は、挙人であった魯希曾が病で辞職して帰郷し死んだ後、その長男魯怡堂、次男魯寄湘は求職もせず阿片を吸飲し、「坐吃山空」の状態で、支出が多く、急激に没落に向かっていった。魯怡堂の家は断絶し、魯寄湘の魯家は没落に向かい、薬屋を開き騙されたのを魯迅が救い、二度上京し魯迅が世話をしたが失敗した。なお、魯希曾の長女は阮家の阮有俊に、次女魯蓮は酈家の酈拝卿に、三女魯瑞は周家の、魯迅の父周伯宜に嫁いだ。が、息子二人と、三人の娘の夫三人はいずれも挙人に合格せず、また、長くは生きられず、魯家、阮家、酈家、周家はいずれも没落するか、没落に向かっていった。

また、前段で述べたように、魯迅の母の二人の姉の嫁ぎ先である、阮家や酈家も没落の途上にあった。阮家の四人の息子は没落読書人の末路である師爺になった。酈家は酈拝卿が骨董品の収集、各地の回遊や碑文の収集などで散財し、ついには邸宅を売り転居に至った。このような事情がある両家も紹興の零落していく上流階層と考えられる。ただ、阮家については没落した原因がよくわからないので言明は避ける。

そして、周介孚へ科举の不正を依頼した五家、顧・馬・陳・孫・章家は、合格できそうもない子のため賄賂を贈った上層階

層である。が、事件が発覚し、入獄したのは結局周介孚だけで、周伯宜は科挙の資格を失い、他の人は結局罪を問われなかった。これにより周家は没落を速め、魯迅は没落の苦さを味わった。よって、魯迅が五家について腐敗墮落した醜惡な上層階層であると思っても不自然ではないだろう。

さらに、章介眉、王金發、王金發に群がる有力者も考えられる。章介眉はいち早く紹興光復を宣言し手柄を立てようとしたが、王金發によって秋瑾の件で逮捕され、全財産を寄付することで釈放され、後に袁世凱の手を経て財産を取り戻した。魯迅は『論《費厄撥賴》應該緩行』で、打倒された地主が奪い返した典型的な裏切りの例として取り上げた。この人物は腐敗墮落し虚偽を働く上層階層であることは明白である。また、紹興の光復は、指揮した都督王金發は有力者たちに取り込まれ、上層部の顔ぶれは変わらず、辮髪がなくなった以外何も変わらず、名だけの虚偽の革命に終わった。初期の目標を失った王金發と、王金發に群がり自己保身を図っていく有力者たちは、紹興における腐敗墮落した上層階層の一つであると考えられる。

つまり、魯迅がよく知る、腐敗墮落した紹興の上流社会とは、周家を始めとした魯家、鄺家、章家などの五家、章介眉、王金發、王金發に群がる有力者たちなどが合わさった紹興の上層階層のことではないだろうか。このような周家を始めとした紹興の上層階層について、魯迅は、支配者あるいは封建社会が被支配者を支配するという見方よりも、少年期より感じ取っていた尋常ならざるものが、確固とした自立した人を目指す「人の思想」の基を育みながら、「人の思想」の忌み嫌う腐敗、墮落、虚偽と認識していった見方の方がより強く心に刻まれ、また、小説作成に繋がる材料でもあったので、「下層階層の苦痛」と対置する「上流社会の虚偽と腐敗」や「上流社会の墮落」という文言を取り上げたのではないか。

「下層社会の苦痛」の文言は、魯迅の支配被支配という階層の見方によるものである。この階層の見方は諸作品に描かれたが、「人の思想」に迫いやられ、また、「人の思想」の具体的活動に専念するため、實際上政治的活動には繋がっていなかった。が、この階層の見方は後のマルクス主義の受容の素地となり、マルクス主義の骨子に発展していった。もっと言えば、少年魯迅が、自分と農民とを区別し隔絶している尋常ならざることに気づき、それが後に階層意識を強め、支配被支配の認識となり、支配層を否定する基となり、そして、後に「下層社会の苦痛」という表現に至った。従って、「下層社会の苦痛」の認識の素地は早くにでき上がっていたと言える。紹興の下層階層に対する魯迅の見方はこのように長い経過の間に形成されたものである。

「上流社会の虚偽と腐敗」や「上流社会の墮落」の文言は、「下層社会の苦痛」と同じく諸作品の材料となり描かれたが、この文言は支配被支配の階層の見方やマルクス主義の立場によるものではなく、腐敗、墮落、虚偽を最も忌み嫌い、人の確立を目指す「人の思想」の立場によるものである。が、文学作品の発表や翻訳などの「人の思想」の具体的展開活動について魯迅は尽力したが、「超人」などが現れないこともあって魯迅が期待する展開にならず、魯迅は思想上焦燥に駆られ、「人の思想」は色あせていく。が、後に「上流社会の虚偽と腐敗」や「上流社会の墮落」と表現したように、「人の思想」は生きていた。もっと言えば、少年魯迅が回りの上層階層の人々に感じ取っていた尋常ならざるものを、後に「人の思想」の最も嫌う腐敗、墮落、虚偽と認識し、また逆に「人の思想」を育み、そして、「上流社会の虚偽と腐敗」や「上流社会の墮落」と表現するに至った。従って、「上流社会の虚偽と腐敗」や「上流社会の墮落」の認識の素地もまた早くにでき上がっていたと言える。

紹興の上層階層に対する魯迅の見方もこのように長い経過の間に形成されたものである。

「上流社会の虚偽と腐敗」、「上流社会の墮落」の文言と、「下層社会の苦痛」の文言とは一見整合性のない組み合わせのように見えるが、両方とも少年魯迅が感じ取り気づいていたものが基になっていて、また、両方とも小説の作品の中で描かれた。そして、支配被支配の階層観と「人の思想」とは、それぞれ紆余曲折の後、1933年作の『英译本《短篇小说选集》自序』という作品の中で「上流社会の虚偽と腐敗」、「上流社会の墮落」と、「下層社会の苦痛」の表現で出現し、互いに交錯したのである。

〈注釈〉本論文「下」の注釈番号は前号論文「上」の注釈番号に続いている。

- (38) (50) 魯迅『英译本《短篇小说选集》自序』（1933年、『集外集拾遺』）389頁、389頁、『魯迅全集第七卷』人民文学出版社1981年版。以下『魯迅全集』は人民文学出版社1981年版を用いる。
- (39) (45) 魯迅『350824致蕭軍』（1935年、『书信』）195頁、196頁、『魯迅全集第十三卷』。
- (40) (41) (42) 周冠五『周氏家族的经济情况』230～232頁、231、232頁、238頁、『回忆魯迅房族和社会环境35年间（1902—1936）的演变』人民文学出版社1959年。
- (43) (44) (47) 周冠五『周氏的崛起与衰落』1、2頁、3頁、3、4頁、『回忆魯迅房族和社会环境35年间（1902—1936）的演变』人民文学出版社1959年。
- (46) 周冠五『三台門的遗闻佚事』7～70頁、『回忆魯迅房族和社会环境35年间（1902—1936）的演变』人民文学出版社1959年。〈＊〉は周遐壽『第一分 百草园』24頁、76頁、86頁、

- 88頁、93頁、『魯迅的故家』人民文学出版社1981年。
- (48) 魯迅『《吶喊》自序』（1922年、『吶喊』）、415頁、『魯迅全集第一卷』。
- (49) 魯迅『琐记』（1926年、『朝花夕拾』）、293頁、『魯迅全集第二卷』。
- (51) (52) 紹興魯迅紀念館編『魯迅故里图文集』158, 159頁、158, 159頁、西泠印社出版社2016年。
- (53) 周遐壽『第一分 七六台门的败落』102, 103頁、『魯迅的故家』人民文学出版社1981年。
- (54) 魯迅『俄文译本《阿Q正传》序及著者自序传略』（1925年、『集外集』）83頁、『魯迅全集第七卷』。
- (55) (56) 周介孚『恒训』22頁、17頁、北京魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅研究资料9』天津人民出版社1982年。
- (57) (58) (63) 張能耿，張款『第十六章 魯迅的外祖父家』239～241頁、249～254頁、254～256頁、『魯迅家世』党建读物出版社2000年。
- (59) 周遐壽『第一分 三六魯家』48頁、『魯迅的故家』人民文学出版社1981年。
- (60) (68) 紹興魯迅紀念館編『魯迅与他的乡人第一集』169頁、200, 201頁、西泠印社出版社2014年。
- (61) (62) (64) 張能耿，張款『第十七章 魯迅的表兄弟』270, 271頁、268～273頁、264～267頁、『魯迅家世』党建读物出版社2000年。
- (65) 馬蹄疾『关于魯迅祖父周介孚科案五姓之陳的家世』65～67頁、『魯迅研究月刊第十一期』北京魯迅博物館魯迅研究室1990年。
- (66) (67) 魯迅『论《費厄泼赖》应该缓行』（1925年、『坟』）、273頁、279頁、『魯迅全集第一卷』。
- (69) 魯迅『自传』（1934年、『集外集拾遗补编』）361頁、『魯

迅全集第八卷』。元来標題はない。

(70) 鲁迅『范爱农』（1926年、『朝花夕拾』）313, 314頁、『鲁迅全集第二卷』。

(71) 鲁迅『《越鐸》出世辞』（1912年、『集外集拾遗补编』）39, 40頁、『鲁迅全集第八卷』。

(72) 鲁迅『阿Q正传』（1921年、『呐喊』）、517頁、『鲁迅全集第一卷』。

(2017.12.8)